



## つれづれ時事寸評 6

### 保育の商品化

—子ども・子育て新システムの問題点

高林 秀明

熊本市新大江にある「ひまわり保育園」の保護者会会長になって2年目。署名活動や学習会、パレードなど、にわかに保護者会活動が忙しくなってきました。

というのも、2010年6月、政府・民主党が、現在の保育制度を根本的に変える政策（子ども・子育て新システム）を打ち出したためです。その内容は、児童福祉法第24条における自治体の保育の義務をなくし、営利企業に積極的に参入させて保育の商品化を図るものです。政府による「緊急経済対策」（2009年12月）や「新成長戦略」（2010年6月）でも待機児童解消や保育の潜在的需要をねらった保育の産業化を目指しています。一言でいえば、「保育制度の介護保険化」です。

新システムは、待機児童の解消を名目にしてありますが、児童福祉法第24条がなくなってしまうえば、その時点で「待機児童」（熊本市では保留児をあわせて約1000人）という概念は消えてしまいます。自治体行政は親の就労時間などを基準にして「要保育認定」を行えばよいのであって、保育の現物給付義務はなくなります。あとは保護者が自分で保育園を探して契約するのですが、保育所が不足していて利用できない場合の責任は親自身が引き受けなければなりません。また、この仕組みによって、利用者に代わって補助金を代理受領する営利企業等は、補助金の用途制限を受けることなく株主への配当を行うなど、自由

に稼ぐことが可能になります。

さらに、政府は保育所最低基準を地方条例化する方針を示しています。現在でも劣悪な最低基準がなくなれば、保育の質は維持できなくなります。保育園の職員配置基準は、3歳児で子ども20人に対して保育士1人です。この基準は過去40年間まったく改善されていません。諸外国の水準、たとえばニュージーランドの6人に1人、フランスの8人に1人と比較しても著しく低いことがわかります。日本の4歳児は、小学生並みの扱いで、子ども30人の大集団に対して保育士はわずか1人です。しかも、保育園の開所時間は年々長くなり、1日11時間から13時間の開所は当たり前のようになっています。少ない保育士で、保育時間が伸びれば、保育の質は当然低下します。そして、奮闘している保育士の健康状態に影響します。

昨年、ある保育園で18人の職員に休憩時間に関する調査に協力してもらいました。その結果、8割の職員が休憩時間をまったく取れていないことがわかりました。昼食の時間さえ10～15分程度でした。しかも子どもを見ながら、あるいは打ち合わせをしながら、といった状態です。トイレにさえ行く時間がなく、膀胱炎を経験した職員が少なくありません。いつも笑顔でいるために、頭痛薬などを飲みながら仕事をしている職員も。「5分でも子どもから離れて目を閉じて休みたい」という声もありました。

新システムになれば、参入企業は利潤を上げるために当然人件費を抑制します。そうなれば、今でも休憩さえとれない保育現場は危機的な状況に陥ります。保育士の雇用・労働条件はさらに悪化し、保育士の健康状態もいっ

そう深刻になり、そのしわ寄せを受けるのは子どもたちです。子ども一人ひとりを大切に丁寧にかかわろうとすれば、子ども集団をもっと小さくし、保育士の数を増やし、その雇用・労働条件を安定させることが必要です。

先日、「パリ20区」という映画を観ました。驚いたことに、パリのある中学校の成績を決める会議の場面で、教師に交じって生徒代表が参加していました。昨年10月、高齢者の年金支給年齢を60歳から62歳に引き上げる法案に対して、フランスの高校生の2割が授業をボイコットしてデモに参加したというニュースを思い出し、パリの中学生の取り組みは民主主義の背景の一つであると知ると、納得もできました。

ところで先日、我が家の夕食で、鍋を囲んでいるときに、うどんを入れるのは先か後かという話になりました。私は「後派」なので、「今回はお父さんが決めさせてもらう」と言うと、すかさず「ダメだよ、みんなで話し合って決めるんだヨー」と保育園に通う6歳の息子。「やられたー」と思いましたが、その一言が、6年間の保育園における子どもたちや



下通りでの新保育制度反対パレード(2010.12.18)

先生方との集団保育の中で培われたものだと思うと、感無量でした。

ひまわり保育園では、たとえば、生活発表会の「劇あそび」の役決めの際も、子どもたち同士の話し合いを大切にしています。3・4歳児が一緒に、交代でいろいろな役を楽しみながら、少しずつやりたい役を見つけていきます。いよいよ役決めとなり、まずやりたい役を聞いていくと、「ボクはお父さんねずみ」「ワタシはドドさんの子ども…」などと希望が出ます。そこで、自分の思いだけでなく、まわりの人はどう思っているんだろう？と、子どもたちにも話を聞いてみます。とにかく意見を求められることがうれしくてたまらず、「ハイハイハイ！□□の役は○○クン」と次々に。希望していなかった役のところでも名前があがるとそれはうれしいもので、「エーボクナノ？」なんて言いながらテレ笑いも。このような話し合いと練習の中でみんなが納得して役が決まっていきます。子どもたちの発達を長い目でみて、根気強い日々の保育実践の積み重ねがあってこそ、「みんなで話し合って…」という思いが子どもたちの中に育っているのです。

新システムによって保育が商品化されれば、集団保育の中で子どもたち一人ひとりを大切にする保育はできません。ヨーロッパの保育においてはさまざまな共同作業や決定過程への参加を通してデモクラシーの原則を理解することが尊重されています。それは公的な保育制度の枠組みがあってこそ成り立つものです。保育は「思想の実践」でもあります。商品化された保育ではできないことです。

(本研究所研究員 生活問題調査)